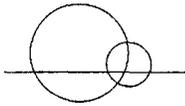


〈諸事項の報告・紹介〉



『愛知大学史研究』第3号の刊行について

大学史事務室 佃 隆一郎

この『年報』に先立って、同じ愛知大学東亜同文書院大学記念センターより2009（平成21）年10月31日に刊行された『愛知大学史研究 2009年度版（第3号）』は、「〈特集〉小岩井 浄」として、藤城和美・本学名誉教授の大部な論文「小岩井浄と人民戦線—愛知大学創立の思想的断面—」を中核に据えた構成をとった。

藤城氏の論文はA4判左右2段組（横書き）で116ページにも及び、本間喜一名誉学長とともに愛知大学創成期の重要人物であった、小岩井浄第3代学長の戦前・戦中（すなわち愛大創立以前）における社会運動家・東亜同文書院大学教授としての思想的軌跡を追究したものである。藤城氏は愛知大学生時代、すでに小岩井研究を行っていた細迫朝夫氏（第8代学長）のゼミに所属してその嚆矢に接したことから、愛大在職時以降小岩井浄に関する一連の論文を発表し、講演も行っていた人であり、単行本に匹敵するこの論文は、「氏の長年にわたる小岩井研究の集大成」（同号iiページに掲載されている、大島隆雄「『愛知大学史研究』第3号の刊行にあたって」より）となっている。なお、小岩井浄についてはその他、愛知大学大学史事務室に所蔵されている同氏とその妻・多嘉子に関する遺品等の資料のリストが、前年刊行の同誌第2号に収録されている。

そのほかには、論文として広中一成氏の「第二回汎太平洋仏教青年会大会における中国代表团招致問題—藤井草宣研究の一環として—」および、

私の「豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校—愛知大学の『施設面での“前身”』として—」を、それぞれ収録した。東亜同文書院大学記念センターのリサーチアシスタントである広中氏の論は、敗戦直後に愛知大学の創設を支援した、真宗大谷派の僧侶藤井草宣氏が、戦前には東亜同文書院で中国語を学び、日本と中国の仏教徒の交流のために活動した実績の一端を明らかにしている。拙論は副題の通り、愛知大学が豊橋に設立された当時、その敷地・施設を転用したことで“前身”の形になった、旧豊橋陸軍予備士官学校（その前は豊橋陸軍教導学校）についての紹介と、それら施設がどのようにして愛知大学に転活用されたかという点を検証したものである。

さらに、講演記録として収録した、大島隆雄氏の「東亜同文書院大学から愛知大学への発展—たんなる継承か、それとも質的發展か—」は、同氏が本『年報』の第3号に寄稿した同一タイトルの論文に対応したものであり、オープン・リサーチ・センターの大学史部門の代表研究者である大島氏が、自ら「過去3年間の研究蓄積のいわば中間報告である」（同号iiiページ、前掲「…刊行にあたって」）と位置づけているものである。同氏がここで結論として提示している「愛知大学が東亜同文書院のたんなる継承ではなくて、敗戦後のGHQ／CIEによる教育民主化過程で、国家主義を払拭して生まれた新しい質の大学であり、そしてそれゆえにこそ、東亜同文書院および同大学の肯定



的諸側面を継承できた」(同前)という一文は、まさに愛知大学が今後のさらなる発展のために意識していくべきものであると思う。

そのあと、報告として私の「2008年度の『大学史』リレー講義について」を収録したほか、最後に掲載した目録「愛知大学刊行の歴代『年史』目次一覧」および「『写真集 愛知大学の歴史 1946-1996』使用写真一覧」は、本オープン・リサーチ・センターの一業務である「資料・刊行物・写真のデータベース化」の一環である。この作業はまだ始まったところであり、当面は冊子の形で逐次目録をまとめることになるが、これまでの愛知大学史の編纂や資料整理の軌跡を知っていただく面で、この両目録が少しでもお役に立ちうれば幸いである。

このように新機軸も織り込みつつ、第3号の刊行を果たした『愛知大学史研究』であるが、諸事情により2010年度は、第4号の刊行を見合わせるようになったことを、(あらかじめご了承ください)ここで最後にお知らせすべきであろう。むろんこれは、創刊号、さらには前身の『愛知大学史紀要』(全4号。1994~2001年刊)の

頃から編集に携わってきた私にとっても、本当に残念なことであるが、短く少ないながらも両誌で培われてきた“愛知大学史論”が、まずは本『年報』やその他学内誌に場所を移す形で、これからも継続、深化されていくように努めなければならない。

〔付記〕

『愛知大学史研究』の刊行休止と同様に、3~4年前よりこれまで豊橋と名古屋(三好)校舎双方で開講され、この『研究』で随時状況を報告してきたリレー講義「大学史」が、2010年度はどちらも開講が取りやめになることに決まったことも、同講義の実質的コーディネーターを務めてきた私にとって正直残念である。取りやめの理由の一つと思われることとして、担当をさせていただいた元本学教員や卒業生の方々が高齢化したことがあろうが、該当の方々の講義は2009年度にビデオに収録したところであり、各方面での今後の活用が試されよう。また、『愛知大学史研究』についても、主要部をデータ化して今後もインターネットで閲覧できるようにする作業が進んでいることを記しておきたい。